The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂モニターの試行
Author(s)	
Citation	懐徳堂センター報. 2005, 2005, p. 205-213
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24375
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂モニターの試行

モニター（monitor）とは、もともと音質や画像をチェックする監視装置のことを言い、そこから、放送局や企業からの依頼を受けて、番組の内容や製品の品質などについての意見を述べる人のことをも意味するようになった。

大阪大学文学研究科と(財)懐徳堂記念会では、平成十六年度からこのモニター制度を開始することとした。懐徳堂の事業や研究について、広く意見・感想をいただこうという試みである。

ただ、どのような方法や規模で、また、どの程度の反応があるのか分からないままに始めることはできない。そこで、平成十五年度をその試行期間とし、サンプル的に調査を行うこととした。

試行モニターの対象者は、筆者が担当した大阪大学全学共通教育科目「中国哲学基礎」の受講生、および平成十五年度の「懐徳堂アーカイブ講座」の講師を務めていただいた島根大学の竹田健二氏の受講生である。

ここでは、全二十三通の回答の内、八通を選出し、以下に掲載する。（掲載に際しては、それぞれの執筆者の了解を得ている。また、執筆者の学年は平成十五年度当時である。）

なお、平成十六年度に本格的に開始された懐徳堂モニターについては、本誌の「体験懐徳堂ＣＤ-ＲＯＭの制作と懐徳堂モニター」をご覧いただきたい。

（文学研究科教授・懐徳堂センター専門委員　湯浅邦弘）

電子展示で見る懐徳堂文庫

大阪大学文学部一回生　大野真愛

私は自称アナログ人間である。とは言っても携帯電話は持っているし、レポート提出もパソコンで打っている。ただ姿勢として、メールの文字よりも手書きの文字の本が好きで、ネット配信される小説の続きを読むよりも、多少遅くなっても文庫本をめくりたいという人間なのだ。だからこの電子懐徳堂文庫もなにやら邪道な気がしていた。しかし実際ホームページあちこちを覗いてみると、これが意外に面白い。今回主に見たのは、附属図書館のホームページから飛べる、「電子展示で見る懐徳堂文庫」と「ＷＥＢ懐徳堂」である。

私も大阪大学に入学するまで懐徳堂を知らない人間の一人であった。大坂といえば緒方洪庵の適塾が有名であるし、日本史に興味のない私でもここは訪れたことがある。閑静なオフィス街の一角にあり、対照的な風景がおかしかったのを覚えている。しかし懐徳堂は建物の方は空襲で焼けてしまっているらしく、その分知名度も適塾より低いのではないだろうか。

授業では懐徳堂については少し触れたという程度であったので、「ＷＥＢ懐徳堂」のページを閲覧し、改めてこれが町人出資の設立だということに驚いた。設立者の中には鴻ノ池の名前もある。これはあの財閥のもとだろうか。昔の商人の方が現代の企業よりもメセナに力を入れていたと考える

と、現代の日本は遅れていると思う。というより心の持ちようの違いなのだろうか。昔の大坂商人は、商売人ではあるけれども、利益のみを追求するのではなく、徳を懐う心を忘れなかったのだろう。さすが文化のある町、大坂の商人は違う。素晴らしいことだと思う。

いよいよ「電子展示で見る懐徳堂文庫」のページで資料を閲覧してみる。二、三文書を見てみるが、解読不可能であったので、先へ進む。そして「越俎弄筆」を見つけた。銀杏祭でパネル展示を見た時から気になっていた本である。「バーチャル懐徳堂」よりも「天図」よりも興味を引いた。杉田玄白よりも前に、これほど精密な臓器の絵を描き残した漢学者がいたのはすごい。とても解剖をする友人の傍らで寓目していただけとは思えない。図書館で実際見たときは絵を見るのに忙しくて文章まで目がいかなかったのだが、読んで見ると文章も面白い。始めに人体全部の解剖図やら各種臓器の絵やらが描かれており、途中から文章になるのだが、いきなり「心は肉塊なり。」との記述がある。この時代にここまではっきりと言い切ってしまえる辺り、さすが中井履軒としか言いようがないだろう。また肺については「肺は肉塊にあらず。」という文から始まっており、言葉の的確さと表現の潔さにただただ感心してしまった。漢学者といえども文字の世界に留まらず、自ら医学などの分野に進出してゆくあたり、大坂人のバイタリティーと底力を感じる。履軒のような漢学者の流れを汲んだ大学に在籍していると知って、大変嬉しく思う。

初めは電子化ということに懐疑的であったが、やはりネット上で公開してもらえると、誰でも手軽に閲覧できるのが良いと思い直した。図書館の書庫にしまわれたままでは一生目にすることも無かったであろうし、いつしか忘れ去られてしまうだろう。このホームページから新しい学問の形を見た気がする。

懐徳堂について

大阪大学法学部一回生　高田晃子

私は、正直この大阪大学へ入学するまで「懐徳堂」について名前は聞いたことがあったものの何も知識を持っていなかった上に興味もさほどなかった。しかし「中国哲学基礎」の授業中に大阪大学附属図書館の資料などを見学させてもらい、自分がこれから学ぶ大学の学問の源流について少しでも知ることができたらという思いを抱くようになった。ちょうどその時、懐徳堂モニターの話題が出たので参加することを決めた。特にその成立・学問内容に興味があったので、そのことを中心に以下に述べる。

まず、懐徳堂が五同志と呼ばれる五人の大坂商人三星屋武右衛門、道明寺屋吉左右衛門、船橋屋四郎左右衛門、備前屋吉兵衛、鴻池又四郎が私財を投じて設立したものであるということに驚きを感じた。なぜなら、学校の建設者が学者でなく商人中心であったということ、設立費用が幕府からのものでなく私財であったことが意外であったからだ。しかし、江戸時代の大阪は「大阪の衰微は、天下の衰微」と評され、「大阪は天下の台所」と称されるほどに経済的に栄えており、新しい文学や学問を生み出すエネルギーを持った町であったということを考えれば、大阪の経済活動を支える商人達が文学や学問の担い手として活躍することもさほど意外ではないということに気づく。後に幕府の公認の学問所となったものの、商人が家業のかたわら自らも学ぶため設け、それを運用することで利益を稼ぎ、自主的に運営するといったいわば半官半民の体制が基本となった懐徳堂であるからこそ、宝暦八年定書の「書生の交わりは、貴賤貧富を論ぜず、同輩

となすべき事」という著名な規定のように、学問の場においてはすべて平等であるといった厳しい身分制度の当時にあっては全く新しい発想を取り入れ、謝金についても貧しいものは紙一折、筆一対でも良く、出席に関しても学生たちの家業を考慮したうえで中途退席も認めるといったかなり自由な精神が取り入れられていたのである。このような自由で斬新な精神のもとで学ぶことにより、既成概念にとらわれない新しく先進的な発想がうみだされ、多くの学問的な成果を残すことが可能になったのである。

次に具体的な学問に関して述べる。懐徳堂初代学主の三宅石庵の学風は朱子学を基本としながらも、様々な学問の長所を何でも積極的に取り入れた折衷的な独特のものであったため「鵺学問」と批判されることもあった。しかしその折衷的傾向は、良い意味で懐徳堂の自由で批判精神に満ちた学風を形成していった。私は職業で栄えていた大阪だからこそこの鵺学問が学生に受け入れやすかったと考える。なぜならば商売というのは物の良い点悪い点を見極める勘や経験が重要であり、柔軟な感覚で時代変化や社会状況をとらえていかなければならない職業であり、そのような商人が活躍する大阪では町全体として比較的自由かつ、斬新的な雰囲気があり、学問としてもあるものに固執するというよりは、様々な学問の良い点は良い点で認め学び、悪い点は批判するというスタイルが自然に受け入れられたと考えるからだ。又、「万年先生論孟首章講義」に注目すると、この講義で石庵は商業活動や営利事業を論ずるのではなく、それらを根底にあって支える「人の道」の重要性を力説しているのである。また、伝統的には対立する思想である「利」と「仁義」についても柔軟な思考展開によって両者を統合しているのである。ここでも先ほど述べた折衷的鵺学問の良さが発揮されているといえる。

今回大雑把ではあるが懐徳堂の成立や学問を知ることで、自分の身近に貴重な資料があり、それを少しではあるが拝見できたことは貴重な体験であったと感じている。又、大阪大学文系学部にこれほどの歴史があったということは驚きであるとともに、誇りであると感じた。しかしながら、大阪大学の学生であっても懐徳堂についてあまり知らない学生が多いように思う。私の友人達にも懐徳堂について意見を求めると、よくわからないという返答がほとんどであった。これは非常に残念なことであると思う。「懐徳堂記念会」のホームページなどは、懐徳堂について非常にわかりやすい説明がなされていると感じたので、他の私のように懐徳堂についての知識を持たない学生に是非見てもらいたいと感じた。

大坂風学問の在り方について

大阪大学経済学部一回生　木内創太

私は大阪大学で勉強をはじめてから約半年になる。その間様々な人々と親しく付き合い、その考え方に触れることによって、彼らの生まれ育った土地環境が彼らの価値観に大きく影響を与えている例をたくさん知ることができた。私自身についても、自分が京都人であることを深く意識した事は無いのだが、友人と会話する中で私がいかにも京都に住んでいる人であるというような指摘を受けることがある。

これと同じように、学問の在り方についてもその地方独自のものがあるのではないだろうか。懐徳堂が大坂の町に誕生してより約二百八十年、大坂の町とそこに住む人々は懐徳堂の精神を今に伝えているのだろうか。私はこのことを確かめたく思い、インターネット上の関係資料、及び講義中

に頂いた「電子懐徳堂考」の懐徳堂の学則に関する部分を詳しく見てみた。

手始めに懐徳堂の玄関にかけられていたという壁書をみると、そこには、懐徳堂の精神がありありとにじみ出ている。その一に、学問は忠孝を尽くし職業を務むる等の上に之有る、とあるが、それは日常生活から離れ自分勝手な学問の世界に没頭してしまうことを戒めているように思える。まず自分の仕事をしっかりして生計をたて肉親を中心とする身の回りの人々とうまく付き合っていくことが肝心であり、その後に各々の究めるべき学問の世界が存在する、と筆頭に述べているのである。さらに続いて、書物持たざるものも聴聞苦しかるまじく候う事とある。これは貧富に関わらず学問をする気が有る者なら誰でも参加できるという懐徳堂の自由な気風をあらわしている。また、叶わざる用事出来候わば講釈半ばにして退出之有るべく候うとして、たとえ学問の最中であっても日常生活上において優先すべき用事が生じた場合にはそれを優先させるよう定めてある。これはいかにも実利を重んじ、それゆえ時間の重要性を認識していた大坂商人の精神が表れているようで非常に興味深い。

その二においても懐徳堂の面白い特徴が見受けられる。聴講の席順は武家を上座に据えること、但し講義が始まってしまった場合には適用されないという内容は、他塾において町人、武家の区別なしに聴講していたところ規律が乱れ、結果塾生が減ったという情報によるものであるそうだが、懐徳堂ではその失敗から学び武家町人の区別をつけながら、講義の始まった後では不問にするとして「学びやすさ」という実用性をとっている。これらの学則からは大坂という町のもつ実益重視の発想を窺い知ることが出来る。

しかし、懐徳堂の学則の中でもっとも目を引くものは、「懐徳堂内事記」に記されている謝礼に関する規則である。それには、貧しさゆえに相応の謝礼が支払えない者に関してはいくらかの紙や筆でもかまわないとある。この中からは、学問をする資格があるかどうかはその者の金銭によるのではなく学問を志す心によるとする高遠な理想が読み取れる。大坂という商人の町、その現実的な経済的基盤に支えられた懐徳堂がこのように先進的な理想を抱いていたことは現代に生きる私達の学ぶ姿の原点を示しているようで、時を経て大阪大学で学ぶ身として大変心強く感じられる。

今回参考資料を見て最初に感じた事であるが、どの資料も分かりやすく作ってあり興味をもった事柄を手早く見ることができる。特に「電子懐徳堂考」はコンピューターの特性を活かし、西村天囚の著した懐徳堂考をうまく分解し、目次から各項目へ、さらには解説を要する語句まで容易に辿り着けるように丁寧に設計してある。また語句の解説も詳しく、懐徳堂について何の予備知識がなくても苦労なく読み進む事が出来ることが大きな長所としてあげられるだろう。つまりこれらの参考資料は、懐徳堂に関するものでありながら、便利性と自由闊達の調和という懐徳堂の精神をそのまま受け継いでいるともいえる。

私は懐徳堂関係の資料に触れた経験はごく少ないのであるが、今回資料を閲覧し、懐徳堂の歴史を今に伝える試みがここ大阪大学において活発に行われていることを知って、一学生として大変安心感を持てた。将来誰かが、私達がこれからここで学んでいくその記録を残してくれるなら、これ以上幸せなことはない。今はただ、自分がその記録にとどめられる価値のある学問ができるように祈り、かつ努力するのみである。

学校の在り方を「懐徳堂」に学ぶ

島根大学教育学部一回生　遠藤和親

今から約二百八十年前、日本にはまだ組織的・体系的な「学校」がすくなかったころに活躍した懐徳堂ではあるが、教育や経営の方法・学校の在り方などを観てみると、現代の教育に通用するような理念や、今日の教育において問題視されている課題に類似している部分があることを発見した。

懐徳堂は近世日本の学術と商活動の育成を目的として、大坂の町人によって設立された学校である。主に学ぶのは儒教の朱子学であったが、寛政異学の禁によって朱子学のみを教えていた昌平坂学問所とは異なり、諸学の長所も積極的に取り入れたところに特徴がある。この折衷的な姿勢が自由・批判精神といった学風を形成し、それに大坂の好学と自治を尊重する風土が相まって多くの近代的英知人を輩出したのである。確かに古典的な既存の学問ばかり(この場合は朱子学のみ学習するという体系)をしていても新たな閃き(近代的英知)などは生まれてくるはずがない。この理論は現代の教育にも充分に通用するものであろう。「ゆとり」教育という言葉が登場するようになって久しいが、最近では学力の低下を「ゆとり」教育の弊害として、学力向上をめざそうとする動きが起こっているが、真の「ゆとり」教育とはなんであるか。休日を増やして、学習の程度を下げることか。その結果、子どもたちは学力向上のために休日に塾に通う、それでは本末転倒ではないか。懐徳堂は朱子学をはじめ中国の思想を講じるときに、机上で行わせながら常に主眼は経世に向けられていた。養うべき学力を身につけながら、同時にそれを実用的なものとして捉えていた。学校という世間と隔離された小社会にいながら、真の社会の情勢も掴もうとする「ゆとり」が懐徳堂にはあったのだ。

懐徳堂は町人出資の学校であるが、そのような学校が登場した背景には、封建制度の揺らぎと農工業の進歩による商品経済の発展に伴う危機感とがあった。懐徳堂は「書生の交わりは、貴賤貧富を論ぜず、同輩と為すべきこと」という理念をかかげていて、身分制度を相手にしないスタンスをとりつつ、学校からの規定や圧力を小さくして学生相互の自律・自助を勧めている。また受講料は安く特に貧苦の者には「紙一折、筆一対」でもよいという極めて町民(市民)に合わせた学校であったといえる。この学校の在り方は現代でも見習うべき点である。今の日本は相変わらず学歴社会の傾向がある。当然、進学率が上昇するわけだが今の日本の教育は大変学費がかかる。高校、大学、専門学校、それに伴う塾や通信教育の費用。国が行う教育というのは若い世代が国家を担う力を育成できるための環境を整えることが本義であるのに、経済的な援助は必ずしも満たされているとはいえず、教育が商業的なものになりさがっている。懐徳堂のように学ぶ者のために学校があるというのが真の姿ではないだろうか。学校のために学ぼうとする人がいるのではない。学校は決してビジネスの場であってはならないのだ。

教育は経済と深く関係しているが、政治にも大いに関わるものである。懐徳堂も例外ではなく時の政治と密接な関係に位置していたといえるが、そのため幕末維新の社会的混乱により深刻なダメージを受け、閉じられることになったともいえる。さらに明治新政府は欧化政策を断行し、新たな体制と文化を生み出す一方、伝統的文化の継承に打撃を与えた。近年、教育改革がますます盛んに叫ばれているが政府の都合ばかりを考えた政策だ

と、先例の過ちを繰り返すことにつながるであろう。ここは慎重な議論と先を見越した充分な計画が必要であろう。しかし、まず史実として「書物を持たなくても講義が聞けた」、「途中退座を許していた」という緩やかでいて、自由な懐徳堂という学校が日本にはあったのだということを思い出し、そこに理想をおけば、新しくて伝統的な新時代の学校作りへの道が見えてくるのではないだろうか。

懐徳堂モニター――電子懐徳堂考について――

島根大学教育学部二回生　田村陽介

現在失われつつある貴重な資料を、デジタル化して保存するという活動は、とても有意義なことだと思います。今回拝見しました「電子懐徳堂考」は映像も鮮明で、その資料の保存という観点から見れば、とても優れた内容であると感じました。

この他に「電子懐徳堂考」の意義としては、懐徳堂等の研究材料となることが挙げられているようです。この観点から見てみますと、不具合が生じる部分があるように思われます。今回頂いたものは、起動させると強制的に全画面表示となってしまいます。こうなってしまっては、せっかくのパソコンの便利な点である、並行して複数の作業が出来るというものが完全に殺されてしまいます。また、インストールが出来ないというのも、いちいちCDを入れなければならず、研究の際に用いるとなると、とても面倒に感じるということが起こりかねません。他に研究の際に用いる場合では、本文が画像表示となっているので、コピーしてその後ワードの文章に貼付するという作業が、不可能となっている点も、扱いにくいとされるかもしれません。他には、かなりの個所に注が付けられていましたが、どれも字が小さく、とても読みづらいと感じました。またその中には白文がそのまま載せられているものも見受けられました。漢文をやっている者なら問題は無いかもしれませんが、この資料を見る者の中には、大坂の文化を調べるということで、民俗学などの専攻で、漢文が読めない人もいるかもしれません。そうした場合はこの資料はとても不親切な資料となってしまう可能性があります。

このような問題点の打開策としては、全画面表示以外の表示が出来るようにすること。インストールが出来るようにすること。本文のワードに貼付可能な形のものを付録として付け加えること。注の文字を大きくするなり、表記を変えるなりして、もっと鮮明にすること。白文を載せた場合は口語訳も加えること。といったことが挙げられるでしょうか。

しかし冒頭にも述べましたように、こうした活動はとても有意義なものであると思います。今回は「電子懐徳堂考」ということでしたが、「電子銀雀山孫子」などといったものなんかが、たくさんあればとても便利であろうと思います。それも出来る限り良心的な値段であれば尚更です。そういえばこの「電子懐徳堂考」は一体いくらで売り出されるものなのでしょうか。金の無い学生でも気軽に手を出せる値段であれば、これからこのような活動が広がる要因ともなると思います。

字句の誤りの修正など、なかなか大変な作業を要するものであるのだろうと想像されますが、より良い形に「電子懐徳堂考」が発展し、完成することを願っております。

「電子懐徳堂考」

島根大学教育学部二回生　米田瑤子

懐徳堂については日本史の授業で名前が出た程度で、あまりよく知らなかった。しかしこの「電子懐徳堂考」を見ると、懐徳堂がどのようなものであるかが詳しくわかる。懐徳堂の歴史や、「懐徳堂考」の書誌についてなど、様々な情報がわかりやすく載っている。文章も難しくなく読みやすい。

「懐徳堂考」は数少なく、懐徳堂について学びたいと思っても、本物を手に取ってみるということは難しい。書物は繰り返し読めば破損してしまうだろう。「電子懐徳堂考」ならば「懐徳堂考」を破損せずに、たくさんの人が「懐徳堂考」を読むことができる。「電子懐徳堂考」だからこその利点はほかにもある。たとえば目次から該当ページを検索できるようにしてあるので、読みたい場所を素早く出すことが出来る。また、語句の解説、誤植の正誤を示すページに文章中の語句からリンクしてあって別窓で出てくるので、わからない語句が出た時にすぐに調べることができる点も良い。ただリンクが貼ってあるということがわかりづらいのではないだろうか。語句については色がついているのだが、目次にはそれがない。カーソルを合わせたときに文字色が変わるとか（上巻目次の「石庵と含翠堂」の部分はそのようになっている）、カーソルの形が変わるとかいった変化があった方がわかりやすい。

「懐徳堂考」本文は『次項』『前項』をクリックしなければ他の項へ移らないが、通して見られるようにしたほうが良いのではないだろうか。通してみられるようにしておいて、目次の項目をクリックすればその項へ移るというようにした方が見易いと思う。

語句の解説について気になることは、序文の「豪傑の士」「物換り星移り」の解説が漢文で書かれていることである。漢文を載せるのは良いが、懐徳堂について学びたいと考える全ての人が漢文を学んでいるとは限らない。そのような人でも懐徳堂を読むことができるように、現代語訳を添えるべきではないだろうか。

もうひとつ、疑問に思ったことがある。上巻「懐徳堂創立」の項の二十二ページの上段六行目最初の文字[注]は何であるかということだ。この文字は他にも何度か使われているのだが、何と読めば良いのか分からない。調べればわかるのだろうが、それは他の語句にも言えることであり、これについても説明があると良いと思う。

（編集注）「𠂉」字。「候」のくずし字である。

「懐徳堂」モニター

島根大学教育学部三回生　菅田典秀

近年ＩＴ技術が急速に発達してきていることから、文献の電子化は時代に即した、文化の進化形態であるといえる。そこで、「電子懐徳堂考」と「懐徳堂電子図書目録」を中心として意見・感想を述べる。

結論から言うと、私は「電子懐徳堂考」と「懐徳堂文庫電子図書目録」は各種の電子化された文献と比べてレベルが高い、優れた資料であると考えている。しかし、それ故に、何故両者ともテキストファイルを用意しな

かったか、という不満を持たずにはいられなかった。

「懐徳堂文庫電子図書目録」を現在画像ファイルのみで公開している理由は推測できる。Ｗｅｂ形式で縦書きの文章を表現すると手間がかかり、ブラウザによっては正しく表現されないことがある。その点、画像ファイルなら相手の環境に左右されず、正確に表現することができる。確かに、相手の環境に左右されにくいという点で画像ファイルでの公開は十分なメリットを持っている。画像ファイルでの公開で最大の問題となるサイズは50ＫＢ程度に抑えられており、ストレスをためずに目録を見ることができる。よって、目録を「見る」上では全く問題はない。

しかし、画像ファイルのままではテキストのコピーができず、資料として活用するには不親切である。「絶版となって久しい図書目録を電子情報として甦らせ、世界に発信」することができるサイトとはなっているが、テキストファイルを用意してあれば自分が使いやすい形式で扱うことができ、今よりも有益なサイトになったはずである。「懐徳堂文庫電子図書目録」では縦書きのＷｅｂファイルがあるだけに、この点は少々残念である。

「懐徳堂文庫の図書情報を完備したフルテキストのデータベースとして公開される」とあるが、その際にはぜひ用意していただきたい。

「電子懐徳堂考」については、上記の点や私の環境では最初のページが正しく表示されないといった不満点はあるものの、ドラッグによる画面のスクロールや、拡大・縮小のしやすさにより、感覚的に使いやすい優れた形式になっていると感じられた。また、ＳＸＧＡ画面では適切なサイズとなっていてストレスが無く見ることができた。固有名詞についてリンクが張ってあり、クリックすると別ウィンドウで表示される点もユーザビリティが高い良い機能である。

ただ、フルスクリーン表示のみで、ウィンドウ表示ができず、別の資料と比較するときにいちいちAlt＋Tabキーなどで切り替えなくてはならないのは煩わしい。技術的な問題なら仕方ないと言えるが、修正可能であるならぜひ改善していただきたい。また、小さな点であるが、インストールしてＣＤ無しで利用することができた方が良いと思われる。今はＣＤを入れなければ見ることができず、少々煩わしい点がある。

色々と注文も付けたが、私は今回の懐徳堂の電子化を非常に高く、二千円札の価値を遙かに上回る存在だと、評価している。現在のままではいずれ失われてしまう懐徳堂の文献を、永久保存可能な電子媒体に移し、Ｗｅｂ上にＵＰした今回の取り組みは後世にとって重要な行為と言えよう。その手間は想像しがたいものがあったと思われる。本論は電子化に於いて私の得意分野から注文を付けたが、それらを考慮していただけるとよりいっそうユーザビリティに優れた資料になると思われる。今後の発展を期待したい。

懐徳堂モニター

島根大学教育学部四回生　椿さや子

先日、大学の集中講義[注]で、凸版印刷株式会社の方のお話を伺う機会があった。その講義では、懐徳堂の内容よりは「電子懐徳堂考」のＣＤ-ＲＯＭを通して、情報のデジタル化やそれによってもたらされる情報の普遍化というものを考えさせられるものであった。そのため、今回は関係資料を閲覧することで、内容に触れてみようと思った。

正直に言うと、懐徳堂という名前は知っていたが、内容についてはほと

んど無知であった。そのため、いきなりホームページで「懐徳堂の歴史」や「関連人物」という項目を見ても、ただ言葉を読んでいるだけで、懐徳堂の概要を知るにとどまるだけであった。そこで、まずは身近なものとして利用できる「懐徳堂暦」から目を通すことにした。それには、一日ごとに言葉がひとつずつ示してあり、さらにそれについて詳しく解説がしてあることで、懐徳堂の思想や考え方が理解しやすいものであった。私は中井竹山の『蒙養篇』に関心を持った。特に十六日の「人として人の道をしらず行はずしては、人と生まれたる詮は之無き候」が印象的であった。自分の短所として、何か行動を起こす前にいろいろ考え悩んでしまって、結局実践に結びつかないということを日頃から自覚しており、そんな自分に言われているような言葉であったからである。

「懐徳堂暦」で中井竹山の言葉に関心を持ったため、それについて詳しく調べてみようと思い、「懐徳堂文庫電子図書目録」のホームページに再び戻ってみた。中井竹山の『蒙養篇』を検索すると、それについての解説と、書物の実物を見ることができ、人物像も知ることができた。やはり関心を持って調べたため、始めに見たときよりも理解しやすく、知識として習得しやすいものとなった。

このように懐徳堂の内容を知るといったことは、専門的に学ばなければ分からないのではないかと思い、構えてしまうことがある。しかし、パソコンを開きホームページを見れば、素人でも簡単に触れることができるということは、まさに情報の普遍化ではないだろうかと感じた。

しかし、やはり実際に手にしてみないと分からないこともある。ほんの小さな木片の札かと思っていたものが、実際に手に持っておられる写真をみるとかなり大きいものであったという体験をした。常識の範囲でこれくらいの大きさだろうと考えていても、それとは異なる場合がある。ホームページ上で実物の写真とともに、どれくらいの大きさのものなのかということも知りたい。

パソコンでは大きさや感触までも触れることはできない。さらに詳しく勉強していきたいと思えば、資料やホームページ上だけでなく、懐徳堂記念会のホームページ上でも紹介されていたように、実際に講座や見学会などに参加する必要もあるだろう。

（編者注）平成十五年七月、島根大学教育学部で開講された「共生社会情報処理演習」の特別授業のことを指す。